

## 振り返れば発掘現場

退職にあたり一文を求められた。「遅筆文盲」なるが故に切羽詰った日々だというのに。何を書けばいいのか。披露すべきことなど思いつかない。あるのは在職証明としての思い出か。思い迷っていたらメ切が過ぎた。人には長く、自らには短い36年。うち、現場へ出なかったのは、1976年の飛鳥資料館勤務と2003年の埋文センターの2年だけ。ずっと同じことの繰り返し。そんな気もする。

1973年、2度目の年男。誕生年を入れたら3度目か。記念すべき最初の現場は平城宮内裏地区での研修現場。大きな石敷井戸周辺の実測を同期生と二人で1週間かかり「遅い」と叱られた。その他は覚えていない。この夏は三笠中学跡地の井戸底の砂利洗いで過ぎ、秋にはウワナベ古墳の埴輪が待っていた。洗浄・接合でその年は暮れ、明るく2月、「原稿はまだか」「遅い」の次の一言、「来年は藤原」で平城のことは夢となる。まさに終始一貫、5度目も同じか。地道を自転車ですりつつ、年に2回の大きな現場（この年は大官大寺金堂と藤原宮大極殿院西外郭）と不時の小さな現場。それらを通して、発掘の楽しさや道具と人の使い方を諸先輩・同僚そして作業員さんに教わった。平吉遺跡、飛鳥寺、山田寺、坂田寺…。1981年から石神遺跡、水落遺跡、雷丘東方遺跡、飛鳥池遺跡、そして藤原宮。面積の大小、報道の有無に関わらず総てが第一級の遺跡。それらに携わる幸福な時間の連続。飛鳥藤原の30年。最後の4年は平城で。図面をみれば土色までが蘇り、掘り間違いが夢に出る。現場にいなければ整理室。出土土器には現場の様子も、使った人、作った人の生活や思いがこもり、それらに触れるようで時（間と宿題）を忘れた。「飛鳥は怖い」という。しかし、本当に怖いのは出なかった場合。「9割9分は遺跡の力。気づかなければゼロになる。」これは真実。見落として無いか。先入観、迷路に陥って無いか。真価の何割、いや何分を引き出し得たのか。それらが何も言わないことをいいことにして…。

振り返ったその先には、切れかかった堪忍袋の紐を繕いつつお付き合い頂いた方々がいた。その恩に報いることは何一つしていない。せめて一言、ありがとうございました。「遅い！ 今頃言っても、もはや聞こえない人もいないではないか。」

（都城発掘調査部 西口 壽生）



前列左から、西村管理部長、千田上席研究員、山崎副所長、山中文化遺産部長  
後列左から、小林企画調整部長、飯田業務課専門職員、西口考古第二研究室長